

- (1) 単元名： 思いを見つめて読む
- (2) 教材名：「きつねの おきゃくさま」
- (3) 本時の目標： 第四～七の場面を読み、きつねやひよこたちの様子や気持ちを読み取ろう

奥間小学校2年生16名とH先生の「学び」の授業である。本日は、国頭地区教育事務所の指導主事招聘授業に、中頭地区の百名小学校からの参観もあった。他地区の学校からの参観を引き受けてくれたM校長先生と、H先生、奥間小職員に感謝である。

「学びの協同体」はネットワークでつながる。まさに百名小学校のT校長先生は、前年度まで、国頭村の佐手小学校に赴任していて、今年度より中頭地区へもどり、学校で「学びの共同体」の理念による学校経営を推進している。本日奥間小学校の計らいで、「学校を開く」「教室を開く」の学びの共同体の「公共性」の理念が達成できたことにほんとうに感謝します。



☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

【拡大教科書(テキスト)の活用】



弘樹先生の笑顔。子ども達が安心して語れる空気を作り出している。

国語科における文学教材ではこの教科書を拡大した教具が必要不可欠になってくる。文学に親しむためにより多くの仲間達の「読み」から、各々に多様な「学び」が生まれる。仲間の気づきや、「思い」を一つに共有できることの価値は意義深い。当然、考えを一つにまとめる必要はない。「読み」は子どもたち一人ひとりに自分なりの「読み」があればよい。



0:00 【静かに授業が始まる】



写真①

写真①、教師は椅子に腰かけて、ゆっくり静かに「語る」ように子どもに話しかける、教師も子ども達も実にしっとりしている。「安心」して誰でも語れる空気がある。写真②、前時の3の場面の音読を入れて、お話の内容の想起を図る。



写真②

さて、教師は座って授業を進める。音読も声はそろわない。今日始めて「学び合う教室」の風景を見た百名小の先生方はどう思ったであろうか？

子ども達は前時までのそれぞれの思いを語り、本時の四からの場面の音読に入るが、このクラスの素晴らしところは、教師の声、子ども達の声が重ならないのである。教師の発問に答える時でも、発言が重なりそうになると子ども達は自然に譲り合うのである。だから、大きな声が不必要になって誰でも安心して話せる空気がつくれる。さらに、基本話型も大事であるが、まずは自分の思いや考えを伝えることが大事にされている。

5:40 【四の場面読み】

自分のペースで読み進める。みんな差があるがそれでいい。



7:00 指名読み

8:30 書き込み

教師は書き込みの指示を出す。「気なところ」線を引いて書いてごらん。指示を出した後の教師の眼配りがいい、子ども達の表情をつぶさに見ようとする教師の姿勢が確認される。



12:40 【 四の場面の全体での共有】 各々の書きこみが皆に共有される。

各々の書き込みの「気づき」や「思い」が共有される。教師の「お話し聴かせて」の合図で一斉に手が挙がる(写真③)。みんな「語る」話したいことがいっぱい。教師は子どもの声を大型教科書に反映させる。私の考えが取り上げられることの「うれしさ」がある。

ここでも「聴き合う」が成立している。誰も仲間の発表を否定したりはしない。皆「自分は自分の考えでいい」ことが許される。



写真③



写真④

「自分は自分でいい」となると、何となく自己中心的で、わがまま、身勝手な振る舞いを想像するが、「学び合う」教室では一切そういう子どもはいない。みんな謙虚で慎ましく、互いを認め合いながら他者の考えや思いを受け入れることのできる「しなやかさ」を持っている。決して大げさな表現ではない。

16:40 四の場面を読む

教師：「どうして きつねは おおかみと たたかったんだろう？」ペアで話し合うように指示した。



子ども達は一斉に、お互いに聴き合う。なんの違和感もなく、自然に当たり前のように、自分の考えと、仲間の考えのすり合わせに入る。実にすばらしい！この子達の「学び」への姿勢をぜひDVDで確認してほしい、がむしゃらに自分の意見を通そうとか相手の意見を打ち負かしてやろうなんて邪心は一切見られない。実にしっとり聴き合っている

るのである。みんなの考えがみんなに大事にされている。まさに教室における民主主義の理念である。

18:50 教師：「お話し聴かせて」柔らかく子ども達に投げかける。ここからの対話がさらにすばらしい！

りえ：「あひると うさぎと ひよこを おおかみに 食べられなくなかったから たたかった。」

はな：「食べられたくない、ではなくて 守りたかった。」

この二人の女の子の言い分が、仲間の心に葛藤を発生させる。

京太：「でも、自分が食べたいから たたかった。」

はる：せっかくここまで育てたのに、おおかみなんかに たべられたくない。

りと：「きつねの きもちがかわった。」食べるつもりだったが・・・今は・・・

23:00 教師：「きつねは どんな気持ちで たたかったんだろう。」

もう一度ペアで話し合ってみてください。」



写真⑤



写真⑥

24:30 教師：「お話し聴かせて」再び共有に入る。

かりん：「春から育てているから、もう食べないでおこうと思って・・・

四の場面できつねの心が変わったから、3人を助けるために戦った。」

写真⑤、⑥の「語る」仲間に向けられる、眼差しを見てほしい。「分かるうとして聴く」である。文学教材は多くの仲間達の読みに出会うことが大切である。「どうしてそう思ったんだろう？」必然的に子ども達の思考が深まる。

28:20 五～七の場面を一斉読み → 指名読み → 書き込み

36:40 はな：「なんで はすかしそうに 死んだんだろう。」

37:00 教師：はなさんの「なんで？」を仲間につなぐ「

「ペアで話し合ってください」

りえ：「3人のことを思い出して はすかしそうにわらった。」

40:30 はる：「3人の『守ってくれてありがとう』が ちょっと てれくさくて はずかしそうにわらって・・・死んだ」

はるさんは、四の場面では「せっかくここまで太らせてたのに、おおかみに食べられるのがイヤだったから たたかった。」と発言していた。

さあ、このはるさんの、この場面でのこの発言をどう解釈しますか？

「学び」とは、テキストや、他者の考えや意見から「新たな自分の考えの変容」である。



小波津主事より [ 国頭教育事務所 ]

- ・教師も子どもも、ゆったり、しっとり「文学を味わう」授業になっていた。
- ・指導案について ・評価について ・日常の音読について その他